OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンゴル語の形状語に関する研究
Author(s)	Yamaakhuu, Badamkhand
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54309
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【26】

氏　　名	Yamaakhuu Badamkhand（ヤマーフー　バダムハンド）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２４０６３　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	**モンゴル語の形状語に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　塩谷　茂樹 （副査） 教　授　角道　正佳　　教　授　岸田　文隆 大阪外国語大学名誉教授　橋本　　勝　　講　師　中嶋　善輝

論文内容の要旨

『モンゴル語の形状語に関する研究』と題した本博士論文の要旨は、次の通りである。

最初に、第1部では、「現代モンゴル語の形状語の言語学的特徴について」と題し、そこで明らかとなった結論は、次の4点である。

1. 現代モンゴル語の形状語の音声的特徴として、子音に関しては、語頭の位置に、p音がかなりの頻度で立つ(固有語では見られない)が、r音は全く立たない(固有語でも見られない)こと、また日本語との比較の点から、有声音は語頭でも語中でも優勢に見られ、日本語のように著しく語頭に有利な傾向は見られないことを指摘した。また、母音に関しては、現代モンゴル語の形状語の62％が男性母音、34％が女性母音からなり、中性母音からなるのは、わずか4％余りであることが明らかとなった。
2. 現代モンゴル語の形状語の派生方法には、まず音声的特徴として、子音交替、子音脱落(第1音節頭子音、第1音節末子音、第2音節頭子音に対して)の2つの現象が、また母音交替、短母音化、長母音化の3つの現象が、それぞれ存在することを明らかにした。さらに、現代モンゴル語の形状語の音声的特徴による派生方法を、日本語のオノマトペと比較した結果、現代モンゴル語の形状語は、(1) 母音交替は、最も基本的で生産的な派生方法であること、(2) 子音交替は、特に語頭の有声音：無声音の対立は、現代モンゴル語では、体系的ではなく部分的にしか見られず、決して生産的とは言えないことの二点を指摘した。また、形態的特徴として、形状名詞派生接尾辞 -гар^4、-гай^3、-р、-н(г) の4種が、形状動詞派生接尾辞 -лза^4-、-гана^4- の2種が存在し、それぞれ形状語の語構成に関与していることを指摘した。その他、形状動詞に見られる若干の要素 -чий-、-бай-、-бий-、-жий- 等や名詞派生形状動詞、及び形状動詞・名詞同一語幹についても言及した。
3. これは、第1部では、最も実践的な部分であり、計158の形状語を、意味の点から大きく17のグループに分類し記述した。共通特徴として分類した意味グループは、1. 大きい (太い、厚い、広い)、2. 細長い、3. 突き出る、4. 傾く (曲がる)、5. 弱い (元気がない)、6. なめらかでない (凹凸)、7. はっきりしない、8. 光り輝く、9. なめらか、10. 整然とした (そろった)、11. 乱雑な (不ぞろい)、12. 満足した、13. ぶら下がる (垂れる)、14. 穏やかな (静か)、15. 醜い、16. 閉じる、17. やせた等である。その際、計158の形状語を、家族形状語144と独立形状語14に二分し、特に家族形状語に対しては、意味の成分分析の点から、どの意味成分によって両者が弁別されるかを明確にし、最終的には立方体を用いて、その形態及び意味構造を視覚的に明示した。
4. 日常会話に見える現代モンゴル語の形状語の使用例より、一般にモンゴル語の形状語が“物の形状”のイメージをより生き生きと鮮明に、かつ具体的に描写するという主な機能を果たしながら、モンゴル語の日常会話の中でごく自然に使用されていることを強調した。また、モンゴル口承文芸、特にことわざ・なぞなぞに見える形状語には、修辞学上、主に1）各行同一位置対（ペア）形式、及び2）行頭・行末押韻形式といった2つの形式的特徴が見られること、また、格言や教訓の選集である『ソバシド』を資料として用い、13世紀末、14世紀初めのa) Соном-Гара の訳と18世紀末のb) Лувсанчүлтэм の訳の両者を、通時的に比較考察することによって、モンゴル語の形状語が、一般に文体上、口語的特徴を有することを例証した。

以上の4点が、第1部の結論である。

次に、第2部では、「中世モンゴル語の形状語における若干の形態及び派生的特徴について」と題し、そこで明らかとなった結論は、次の2点である。

1. 現代語に見られる数多くの形状語は、一部ながら、中世モンゴル語の諸文献にも全く同一形式か、あるいは若干形を変えて散見されることから、おそらく古代モンゴル語の時代には、すでに形状語なるものが存在していたものと推定される。
2. 現代語では、比較的頻度の少ない、形状動詞から形状名詞を派生する接尾辞 -rと -γaiの2つの形式は、中世モンゴル語の時代、すでに多くみられることから推察すると、この2つは、形状動詞から形状名詞を形成する、初期の段階の最も基本的かつ生産的な語構成方法であったものと推定される。と同時に、もう一方の -γarは、中世モンゴル語で頻度が少ないことから、古代モンゴル語では、いまだ形成されておらず、元来は *-qai (状態表示) と *-r (名詞表示)から成る複合接尾辞であった可能性がある。

以上の2点が、第2部の結論である。

さらに、第3部では、「『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』（1780）に見えるモンゴル語の形状語の意味的及び形態的特徴について」と題し、そこで明らかとなった結論は、次の4点である。

1.『三合切音清文鑑』（1780）に記されたモンゴル語の形状語と満洲語相当語を比較検討した結果、両者の間には、完全一致型、不完全一致型、完全不一致・共通特徴有り型、完全不一致・意味変化有り型の4つの意味対応のパターンがあることが明らかとなった。
2. 上述した4つの意味対応のうち、特に不完全一致型、及び完全不一致・共通特徴有り型の2つのパターンには、両者の意味のずれの程度の差こそあれ、ある一定の意味の共通特徴を抽出することができ、それによって、かえって一層モンゴル語の形状語の中心的意味（中核となる意味）を明確に提示できる可能性があることを指摘した。
3. 完全不一致・意味変化有り型より、現在では、両者の意味が全く不一致であり、ほとんど『三合切音清文鑑』の編者の誤記であると見られる一部の語は、歴史的に見ると、実はその当時の完全一致型（もしくは不完全一致型の可能性もある）であり、その後に生じた意味変化（意味の退化や台頭）によって、不一致が生じた可能性があることを指摘した。
4.『三合切音清文鑑』にごくまれに見られる、現在のところ全く実証されないか、あるいは、ほとんど使用されない使用頻度の低い形状語は、一般にモンゴル語の形状語に見られる、9つの「音声的特徴による派生方法」の考えを導入することにより、通時的にうまく説明できる可能性があることを指摘した。

以上の4点が第3部の結論である。

また、第4部では、「中国領内のモンゴル系孤立的諸言語に残存する形状語について ―特にモンゴル文語及びモンゴル語との異同の点から」と題し、中国領内のモンゴル系孤立的諸言語の、いわゆる保安語、東郷語、土族語、東部裕固語、達斡爾語の5つの言語を、残存する形状語（形状動詞及び形状名詞）の観点から、とりわけ形状動詞に関しては、1. 形状動詞の有無、2. 固有形状語の有無、3. 形状動詞派生接尾辞 -lǰa- の接続の可否、4. 形状動詞派生接尾辞 -γana- の接続の可否の4点から、また、形状名詞に関しては、1. 形状名詞派生接尾辞 -γar の接続の可否、2. 形状名詞派生接尾辞 -γai の接続の可否、3. 形状名詞派生接尾辞 -r の接続の可否、4. 形状名詞派生接尾辞 -n、-ng、-γ /-g 等の接続の可否、5. 形状動詞・名詞同一語幹の有無の5点から、それぞれ詳細に分析を加え、当該言語に残存する形状語の特徴をできる限り明らかにすることを試みた。

その結果、明らかとなった結論は、次の4点である。

1. 保安語と東郷語は、残存する形状動詞、形状名詞ともにほぼ同じ分布を示し、形状語に関しては、両者は全く同じ特徴を有している。
2. 土族語は、形状動詞に関しては、東部裕固語、達斡爾語とほぼ同じ分布を示すのに対し、形状名詞に関しては、保安語、東郷語とほぼ同じ分布を示し、残存する形状語全

体として見れば、保安語・東郷語の言語群と東部裕固語・達斡爾語の言語群のほぼ中間的特徴を有している。

3. 東部裕固語は、形状動詞に関しては、先の2.で述べたように、土族語、達斡爾語とほぼ同じ分布を示すのに対し、形状名詞に関しては、保安語、東郷語、土族語とは明らかに異なり、達斡爾語とかなり類似した分布を示していることから、残存する形状語全体として見れば、達斡爾語にほぼ近い特徴を有していると言える。

4. 達斡爾語は、先の3.で述べたように、中国領内のモンゴル系孤立諸言語の中では、東部裕固語に一番近い特徴を有するが、形状動詞に関しては、-ljа- 形式が達斡爾語でかなり生産的であるのに対し、東部裕固語では非生産的である点、また形状名詞に関しては、-γai 形式が達斡爾語でかなり生産的であるのに対し、東部裕固語では化石的であるという2点において、両者は大きな異なりを示すと言える。

また、達斡爾語を、モンゴル語・ハルハ方言等を始めとするモンゴル語中央方言と比較すると、両者の決定的な違いは、唯一、形状動詞における -γana- 形式の有無、すなわちモンゴル語中央方言では、比較的多く用いられるのに対し、達斡爾語では、全く用いられないという点だけである。

以上の4点が第4部の結論である。

一般に、モンゴル語の形状語に関する一連の研究は、それ自体がモンゴル言語学の周辺的な分野であり、その研究はまだ端を発したばかりである。今後とも、かかる観点からモンゴル語の形状語全般に焦点を当てて、一層綿密に分析し研究を進めていかなければならない。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、従来先行研究が少なく、モンゴル言語学研究の中心的課題から取り残されがちだったモンゴル語の形状語全般に関し、特に音韻・形態・意味の3つの点に焦点を当て、しかも共時的、通時的かつ方言学的な多角的視野に立って、当該問題の全容解明を目指した画期的、先駆的業績であると言える。

モンゴル語の形状語は、日本語のオノマトペの類に相当する語彙群であり、その表す意味の卑近さゆえに、従来学術的な研究対象とはされにくく、モンゴル国で出版されたモンゴル語辞典の最新版ですら、ある形状語（形状動詞）の意味を、その同一語幹をもった派生語で説明するような記述が普通に行われており、他の語を用いて迂言的に説明し尽くそうとする手間を惜しんでいる。このことからも、モンゴル国において、形状語を記述研究の対象として見る意識が十分に見られないことがうかがい知られる。日本におけるモンゴル語の形状語研究も、そのような不明瞭で不完全な記述の資料しか利用できなかったために、その調査・研究は本格的に行われてこなかった。

本博士論文は、そういった意味からも、従来とかく曖昧にしか捉えることができなかった現代モンゴル語の形状語の表す意味の中核部分が、モンゴル語ハルハ方言の母語話者によって、日本語で解き明かされたことは、何よりも特筆すべき成果であると言えよう。モンゴル語の母語話者によって、複雑に入り組み屈折した形状語の派生関係が理路整然と解明され、それらの表す微妙な意味の差異による、モンゴル人の脳内にある意味構造が、立方体を用いた図式により体系化された。また、複数のイラスト（イメージ図）により、形状語の表す意味が視覚的にも示されたことで、読者にとってイメージと理解が容易になっている。

本博士論文では、その他、ことわざやなぞなぞといったモンゴル口承文芸に見られる形状語について、修辞学的視点から観察した他、『元朝秘史』や『ムカディマット・アル・アダブ』といった中世モンゴル語文献、及び14世紀初めと18世紀終わりの2版の『ソバシド』、さらには『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』（1780）といった近代モンゴル語文献から網羅的に形状語を調査し、通時的視点からも形状語の発展を論じている。また、中国領内のモンゴル系孤立的諸言語に残存する形状語についても考察の目を向け、方言学的視点からモンゴル系諸言語における形状語の実態について詳細な分析を行い考察を加えたのは、本論文が初めてである。最後に、付録としてモンゴル語から長期に渡って大きな影響を受け、大量に語彙借用をしてきたチュルク系のトゥヴァ語に見られる形状語にも言及し、モンゴル語との言語接触の点からも論じている。

本博士論文は、執筆者がモンゴル語ハルハ方言の母語話者であることに加え、様々な言語で書かれた資料を駆使しながら、モンゴル語の形状語を取り巻く諸問題に対して、真っ向から精力的にその体系化に取り組み、しかも多角的視点から当該問題を解明すべく努め、モンゴル語の形状語研究に新たな道を大きく切り開いた点が高く評価できよう。

以上、論文審査の結果を踏まえ、当該博士論文が本学において博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい水準に達したものと判断し、五名の審査委員が全員一致で合格と結論づけた。